国土交通省
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism
Press Release

同時発表：内閣官房

水の週間関連行事

令和７年７月 25 日
水管理・国土保全局
水資源部水資源政策課

全日本中学生 水の作文コンクール受賞作品が決定！

～子どもたちの水への思いがつまっています～

全国の中学生及び海外日本人学校在学の日本人中学生を対象に、「水について考える」をテーマに全日本中学生 水の作文コンクールを開催しており、第47回の今年は総数7,482編の応募をいただきました。
審査の結果、最優秀賞（内閣総理大臣賞）１編のほか受賞作品を決定しました（別紙１）。

本コンクールは、「水の日」（８月１日）及び「水の週間」（８月１日～８月７日）の行事の一環として昭和54年より実施しているものです。次代を担う中学生を対象とし、広く水に対する関心を高め、その理解を深めることを目的としています。
※優秀賞以上の作品は別紙２のとおりです。
入選作品については、以下のHPでご覧になれます。
http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen_mizsei_tk1_000010.html

令和７年８月１日（金）にイイノホール（東京都千代田区）にて開催される第49回「水の日」記念行事「水を考えるつどい」において、優秀賞以上の受賞者の表彰式を執り行います。
※「水を考えるつどい」については以下のHPをご覧ください。
https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen_mizsei_tk1_000024.html

※表彰式では東京都の地方審査で選ばれた東京都知事賞も同時に表彰します。

【作文コンクール受賞作品】
＜最優秀賞　１編＞
〇内閣総理大臣賞

氏名　大峯（おおみね）　果林（かりん）　（宮崎県　宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校　１年）

題名　人の暮らしと命を支える

＜優秀賞　９編＞
〇農林水産大臣賞

氏名　諸根（もろね）　さつき（福島県　矢吹町立矢吹中学校　２年）

題名　水との関わり

〇経済産業大臣賞

氏名　江口（えぐち）　明祐希（あゆの）（千葉県　翔凜中学校　１年）

題名　水と龍といのちをつなぐもの

〇国土交通大臣賞

氏名　風間（かざま）　修羽（しゅう）　（神奈川県　逗子開成中学校　１年）

題名　水でつながる大きな家族の一員として

〇環境大臣賞

氏名　福岡（ふくおか）　京（けい）　（滋賀県　近江兄弟社中学校　１年）

題名　僕が守りたい風景、きれいな水

〇全日本中学校長会会長賞

氏名　小嶺（こみね）　彩（あや）　（長崎県　長崎大学教育学部附属中学校　１年）

題名　生かし生かされる

〇水の週間実行委員会会長賞

氏名　楠本（くすもと）　健琉（たける）　（京都府　京都先端科学大学附属中学校　２年）

題名　メダカが活き活き泳ぐ川

〇独立行政法人水資源機構理事長賞

氏名　吉田（よしだ）　喜一（きいち）　（石川県　学校法人稲置学園星稜中学校　１年）

題名　水道への感謝と僕の決意

〇シャワーズ賞

氏名　三木家（みきや）　杏珠（あんじゅ）　（福井県　福井市大東中学校　３年）

題名　生き物との共生のために

〇中央審査会特別賞

氏名　谷澤（たにざわ）　あかり　（滋賀県　東近江市立能登川中学校　３年）

題名　川の始まりと水の未来

＜入選　３０編＞※別紙１参照

【問い合わせ先】
水管理・国土保全局 水資源部 水資源政策課　満岡（みつおか）、手島（てじま）、宝寄山（ほうきやま）
代表　03－5253－8111（内線：31156、31143、31155）　直通　03-5253-8386

第47回全日本中学生水の作文コンクール　入賞者・入選者一覧

賞名	都道府県名	作文の題名	学校名	学年	氏名
最優秀賞 内閣総理大臣賞	宮崎県	人の暮らしと命を支える	宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校	1	大峯　果林
優秀賞 農林水産大臣賞	福島県	水との関わり	矢吹町立矢吹中学校	2	諸根　さつき
優秀賞 経済産業大臣賞	千葉県	水と龍といのちをつなぐもの	翔凜中学校	1	江口　明祐希
優秀賞 国土交通大臣賞	神奈川県	水でつながる大きな家族の一員として	逗子開成中学校	1	風間　修羽
優秀賞 環境大臣賞	滋賀県	僕が守りたい風景、きれいな水	近江兄弟社中学校	1	福岡　京
優秀賞 全日本中学校長会会長賞	長崎県	生かし生かされる	長崎大学教育学部附属中学校	1	小嶺　彩
優秀賞 水の週間実行委員会会長賞	京都府	メダカが活き活き泳ぐ川	京都先端科学大学附属中学校	2	楠本　健琉
優秀賞 独立行政法人水資源機構理事長賞	石川県	水道への感謝と僕の決意	学校法人稲置学園星稜中学校	1	吉田　喜一
優秀賞 シャワーズ賞	福井県	生き物との共生のために	福井市大東中学校	3	三木家　杏珠
優秀賞 中央審査会特別賞	滋賀県	川の始まりと水の未来	東近江市立能登川中学校	3	谷澤　あかり
入選（30編）	岩手県	水を生かす。水で生きる。	盛岡市立上田中学校	3	芥川　雄哉
	宮城県	めぐる水～故郷の川を守るために～	石巻市立蛇田中学校	2	坂本　悠維
	秋田県	「水」の恐ろしさ	秋田市立岩見三内中学校	2	小笠原　弘礎
	秋田県	岩見川の未来	秋田市立岩見三内中学校	2	石塚　愛菜
	茨城県	私たちの水と森	茨城大学教育学部附属中学校	3	大越　玲舞
	栃木県	ダムを通して考えたこと	栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校	2	金　悠俊
	東京都	大好きな水辺を取り戻すために	東京女学館中学校	3	竹内　杏
	東京都	綺麗な水を保つために	和洋九段女子中学校	2	伊藤　由希
	三重県	未来の海を守るために	高田中学校	2	水谷　真菜香
	三重県	水の歴史に思いを馳せる	高田中学校	2	渡辺　心晴
	滋賀県	未来へ繋ぐ水	近江兄弟社中学校	1	林　咲和
	京都府	水について考える	京都先端科学大学附属中学校	3	山本　栗央
	大阪府	益虫	大阪府立水都国際中学校	3	西海　奏
	大阪府	歌枕の浜をもう一度	大阪府立水都国際中学校	3	八木　美薫
	兵庫県	水と人間の共存	兵庫教育大学附属中学校	2	上田　悠智
	兵庫県	船坂川が教えてくれたこと	西宮市立山口中学校	2	前田　直太朗
	和歌山県	飲める水にありがとう	和歌山県立田辺中学校	3	坂倉　朱音
	和歌山県	断水生活の練習から気付けた水の大切さ	和歌山県立向陽中学校	2	松元　菜那
	鳥取県	私の大好きな故郷・鳥取の水	鳥取市立桜ヶ丘中学校	3	髙橋　彩夏
	愛媛県	先人たちから学ぶ	今治市立南中学校	3	前田　佳汰
	佐賀県	みなもと	佐賀大学教育学部附属中学校	2	田中　絆愛
	大分県	五十年後の僕へ	大分大学教育学部附属中学校	3	西嶋　奏人
	宮崎県	「水は財産」という考え方	宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校	3	堀川　和瑚
	鹿児島県	一服の水	学校法人志學館学園志學館中等部	2	宮脇　愛
	オランダ	水と美しい自然	アムステルダム日本人学校	2	樫内　友彩
	オランダ	命を紡ぎ、繋ぎ、輝かせている	アムステルダム日本人学校	2	小松　結奈
	オランダ	オランダから学ぶ水泳	アムステルダム日本人学校	2	清水　朱莉
	オランダ	水と戦い、水と生きる	アムステルダム日本人学校	3	橋本　葉南
	ブラジル	水を巡る旅へ	サンパウロ日本人学校	1	石垣　志織
	ブラジル	チエテ川を通じて見る日本	サンパウロ日本人学校	2	神戸　風花

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

人の暮らしと命を支える

宮崎県　宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校　一年　大峯　果林

栓をひねると水が出る。朝、顔を洗う。渇いたのどを潤す水をコップに注ぐ。料理をする。洗濯をする。お風呂に入る。生活のどの瞬間にも水がある。その存在は自然で、意識することはほとんどない。水があるから生活が回るということを忘れてしまっている。けれど、私は気が付いた。この当たり前が、誰かの努力によって支えられているということに。気付いて以来、水の流れる音が少し違って聞こえるようになった。

小学校四年生の夏の終わりのこと。大きな台風十一号が九州に接近し家の中にこもったが、風と雨の音が大きく響いて、不安でいっぱいだった。そんな中、父は黙って作業着に着替え、懐中電灯を手に外へ出て行った。

私の父は、市役所の水道課に勤めている。人々が安心して水を使えるように、見えないところで水を守っている。水が止まれば、昼夜関係なく現場に向かう。休日に家族で出かけているときでも、水に関わる一大事を察知すると急いで引き返して現場に向かうこともある。台風の接近はまさに一大事だ。父が嵐の中へ出て行ってしまうのが不安でたまらなかったけれど、ぴんと背筋の伸びた父の背中を見たら、何も言うことはできなかった。

翌日、帰宅した父は疲れた顔をしていたが、私の目を見ながら話をしてくれた。台風の夜、病院のある地域で断水が発生したという。

「病院の断水を復旧できて本当に良かった。想像して。病院が断水になると医療に使う水が足りなくなる。つまりそれは……。」

「命に関わる……。」思わず言葉が出てはっとした。水は生活に必要なだけではなく、人の命に欠かせない存在なのだ。水がなければ、治療も消毒もできない。薬を飲むこともできない。手も洗えずうがいもできず、感染症のリスクも高くなる。水がないことで、守れるはずの命が守れなくなる。思わず父の顔を見た。父の目はまっすぐ前を向いていた。そして、以前父が話していたことを思い出した。

「日本では、水を使えることが当たり前になりすぎているせいか、この仕事をしていて感謝されることはあまりない。水が使えなくなって初めて水の大切さに気付いて感謝する。」その言葉の意味がようやく理解できた。

私には水道管を直すことはできないけれど、水を無駄にせず、感謝して使うことはできる。水の一滴一滴が、水のために働く人たちの技術と努力、そして強い責任感によって届けられていると知った今、小さな行動にも意味があると感じている。学校では「水は限りある資源」と習った。でも私は、水はそれだけでは語れないということに気付いた。水そのものだけではなく、水を支える人たちの知識や技術、経験、使命感をもって働く姿もまた、私たちの暮らしと命を守る大切な資源だ。例えば「台風」という災害があったとしても、水を支える人の「水を止めない」という想いが、水をつなぎ、安心を生みだしている。自然と感謝と尊敬の気持ちが私の心に広がっていった。水の波紋が広がるように。

そして、改めて考える。今、地球では気候変動が進み、水不足や災害が増えている。水を守る仕事の価値は、これから更に大きくなっていく。どんなに技術が進化しても、それを動かすのは人間の想いと未来を見つめる使命感だ。父は今日も人々の暮らしと命のために働いている。決して目立つ仕事ではないが、未来を支える確かな力になっている。私もいつか、目立たなくても誰かを支える人になりたいと思う。今、私は水を大切に使い続ける気持ちは誰にも負けない。小さなことでも自分にできることを見つけて行動したい。たった一滴の水でも、命の水になれるのだから。

ふと顔を上げると、母が台所で流す水の音が心地よく私の耳に響いてきた。

農林水産大臣賞（優秀賞）

水との関わり

福島県　矢吹町立矢吹中学校　二年　諸根　さつき

私の家は畜産農家で、黒毛和牛を育てています。牛を育てるためには、水が必要不可欠で、私の家では地下五十七メートルから地下水を引き、約三百頭の牛がその水を飲んでいます。

私も幼いころから牛の世話をよくしていましたが、牛は汚れた水を絶対に飲まないので常にきれいな水を飲める環境を保たなければなりません。その他、牛を育てるためには、稲わらが必要で、田植えをして、米を育て、収穫した後のわらを集めて牛に与えています。

米を育てるためにも水を欠かす事は出来ません。

水は天からの贈り物で雨や雪が降らないと農業は成り立ちません。自然の恵みで私達は生かされています。しかし、時にその自然が猛威を振るう事があります。

令和元年十月、私が小学二年生の時に台風十九号が日本列島に上陸し、私の家も甚大な影響を受けました。家の周りの川が決壊して氾濫し私の家と牛舎は川の濁流にのみ込まれました。私と姉達は避難していました。両親は、川が氾濫する直前まで牛達を高台に移動したりトラックに出来るだけ牛を詰め込んで一頭でも多く牛を助けるために手を尽くそうとしましたが、全頭助ける事は出来ませんでした。残された牛は生き延びた牛もいましたが、濁流に流された牛、牛舎の中で残酷な姿で亡くなった牛も少なくありませんでした。水の力はとてつもなく、牛舎の中は沢山の流木やがれきや刈り取った後の稲わらなど、その他沢山の泥で埋め尽くされていました。

牛舎や家の壁には二～三メートルの高さのある水害の跡が残っていました。幼かった私には、その状況を直ぐに受け入れる事が出来ず恐怖と悲しさで全身が震えた事を覚えています。

きれいな水を牛に飲ませるために母親の実家から祖父が何度も水を運んで牛に与えました。あの時の美味しそうに水を飲む牛の姿は忘れる事は出来ません。

牛舎の蛇口からきれいな水が出るまで数日かかりました。私も一頭一頭に水を飲ませる手伝いをしましたが、本当に水は貴重だと子供ながらに痛感しました。

あれから月日が経ち、我が家は困難を乗りこえ両親は牛を水害から守るため高台に牛舎を建て日常を取り戻し、米、野菜を作り、牛を育てています。

現在世界各地で自然災害が起こり、苦しんでいる人々が沢山います。地球温暖化の影響だと言われています。これから先の地球の環境を良くするための行動を再認識して私が出来る事、節水、節電などを常に心がけて生活したいと思います。

水に感謝をして。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水と龍といのちをつなぐもの

千葉県　翔凜中学校　一年　江口　明祐希

私達の生活に欠かせない「水」。毎日あたり前のように使っているけれど、水がどこから来て、どんな思いがこめられているのか、意識することはあまりありませんでした。今回、水について自分で調べてみて、自然や神さま、そして地域の人々の思いが深くつながっていることに気づきました。

私の住んでいる千葉は、利根川水系の水に支えられています。利根川は、群馬、埼玉、千葉、東京など、関東の広い地域に水を届けている大きな川です。山に降った雨や雪が長い時間をかけて川となり、ダムにたまり、水道管を通って、わたしたちの家庭に届いています。この水がなければ、料理も洗たくもできないし、お風呂にも入れません。水があることが、どれほどありがたいかをあらためて実感しました。

調べていくと、水と信こうが深く結びついていることもわかってきました。昔の人は、水には神さまの力がやどると考えていて、特に「龍神」という神さまが大切にされてきました。神社やお寺のちょうずやでは、龍の口から水が流れていて、それで手や口を清めてから参拝します。自然と共に生きてきた日本人の感謝の気持ちのあらわれだと思います。

私がとても感動したのが「忍野八海」という場所の話です。山梨県にあるこの場所には、富士山に降った雪が何万年もかけて地下を通り、ろ過されてわき出した池があります。その水はとてもすき通っていて冷たく、まるで龍の息づかいが聞こえてくるようです。昔から人々はその水を生活に使いながらも、神さまの宿る場所として大切に守ってきました。水を「ただの資源」ではなく、「神聖な存在」として見つめる日本人の心が、そこには今も息づいています。

こうした信こうは、遠い場所だけのものではありません。実は、わたしの通っている学校、翔凜中学校のしきちにも「浅間様」がまつられています。この神さまからの水がわいて出ているのが、学校の下にある「大堰」であると言われていて、地元の人たちが昔から稲作や生活用水に使ってきたと知り、とてもおどろきました。私が毎日通っている学校の場所にも、神さまが生み出す水と人々の信こうがあるのです。

そして、その水への感謝の気持ちを伝えるのが「神さまのお祭り」です。水を与えてくれる自然や神さまへの感謝、それを守ってきた地域の人たちの思い。お祭りは、にぎやかで楽しいだけでなく、そうした心を伝える大切な行事だと気づきました。

今、地球温暖化の影きょうで、世界中で水不足の問題が起きています。雨の降りかたが不安定になり、ダムの水が足りなくなることもあります。また、私達の生活を支えるＡＩやクラウドなどの技術も、便利な一方で多くの電力や水を必要とすることを知っておどろきました。特にコンピューターを冷やすための水の使用量はとても多く、私達が気づかない所で自然に負担をかけているのです。

便利な技術は生活を豊かにしますが、自然や資源を守る意識がなければ未来は苦しくなってしまいます。技術の恩けいとその裏にある影きょうを見つめることも、わたしたちにできる大切な学びです。環境を考えるとき、ただ「守ろう」と言うだけでなく、自然に神さまがやどると考える心が大切だと思います。山や川、木にも命があり、敬意を持つことで、自然と人はもっと仲よくできるはずです。

水は、いのちをつなぐもの。自然と人、人と人をつなぐもの、そして、見えないところで龍の力が流れているかもしれない、そんな神ぴ的な存在です。これからも神さまに、水にかんしゃし、自然を大切にしながらいきたいと思います。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水でつながる大きな家族の一員として

神奈川県　逗子開成中学校　一年　風間　修羽

僕は、一昨年の秋の草刈りから始まって、去年一年、南アルプスの麓にある田んぼで米作りをする機会を得ました。その田んぼは、棚田の一番上の場所にあって、川の取水口の開け閉めや、取水口に落ち葉や木が詰まったら掃除をするのも、そこの田んぼ仕事の一つでした。

田んぼから取水口までの道のりは、珍しい山野草などが生えていたり、風向きによっては獣の匂いがしたりするような森の小道でした。地元の人が、「ここは熊が出るよ。」と言っていたので、少し緊張しながら、父や兄と大きめの声で話しながら向かうのですが、この大きな森全体から水を分けてもらいにいくんだという気持ちがして、とても特別な仕事のように感じられ、僕の好きな仕事の一つでした。

川から引かれてきた水は、とても冷たいのですが、田んぼに入るとどんどんぬるくなっていきます。場所によって、水の温度も違って、その温度の違いによって稲の生育の差が見えたり、生えている草の種類が違ったり、集まっている生き物が違ったりするのも興味深かったです。

この田んぼに引かれている水がどこから来るのかが知りたくなり調べる内に、流域地図というものがあることを知りました。流域地図というのは、河川に流れ込む降水の降り集まる地域を表した地図です。その地図によると田んぼに引かれている水は、富士川水系であるということがわかりました。流域という視点で土地を見ると、山の尾根が、流域の境になっているということがわかりました。

僕が、家族と一昨年登った仙丈ケ岳の山頂に降った雨は、東側なら富士川に流れ、西側なら、天竜川に流れる。大地の凹凸が水の流れを決めていて、尾根に囲われた区域が、まるで一つの水でつながった大きな家族のように感じられました。

僕たちの田んぼを潤してくれた水は、水路を通って、隣の田んぼに流れ込みます。その水はまた、その次の田んぼに流れ込み、そうして順番に全ての田んぼが潤されていきます。

稲作というのも、水の流れで繋がった家族みんなの命の糧を生み続ける営みなんだということがわかりました。

僕が暮らしている地域は、流域の視点から見ると下流域にあります。そこには住宅やビルが立ち並び、たくさんの人が住んでいますが、田畑はそれほど多くありません。飲み水も食べ物も少し離れた地域から届けてもらうことでまかなわれています。けれども、水でつながった家族の一員であることには変わりありません。

上流に住み、今まで水源を守ってくれてきた人たちの高齢化が進んでいます。命を支える水を共有する大きな家族として、下流の人と上流の人が一緒に豊かな水を守り続ける事ができる仕組みを作っていきたいです。

暑い中での、田んぼの中や土手の草取りは大変でしたが、よかったのは、時折水の上をとても涼しい風が吹いてくること、そして何より蚊がいなかったことです。たくさん飛んでいたトンボが食べてくれたのではないかと思います。そして、秋の収穫時に、稲穂が波のように風に揺れ、その上をたくさんのトンボが飛んでいる光景を見た時、古事記で日本の国のことを「豊葦原の瑞穂の国」と呼んでいたり、本州のことをトンボの姿をイメージして「秋津島」と呼んでいたりするのは、こういう光景が全国に広がっていたからなんだなと思いました。そして純粋に美しいなと思いました。

今私たちが豊かな水を使えるのは先人たちの努力のおかげです。水でつながる大家族の一員として、先人たちの思いを引き継ぎ、未来へ豊かな環境を届けることは、今を生きる私たち一人一人の使命ではないでしょうか。

環境大臣賞（優秀賞）

僕が守りたい風景、きれいな水

滋賀県　近江兄弟社中学校　一年　福岡　京

僕の小学校の裏には、小さな川があります。そこでは五月下旬から六月中旬にホタルを見ることができます。家の近所には小さなエビがたくさんいるところや、田んぼに続く用水路にはザリガニがとれる特別な場所もあります。僕は生き物と自然あふれるこの町が大好きです。

ホタルを守る取り組みについて、看板が川岸に立てられています。産卵の時期には、あえて草刈りをひかえて、地域の方々が繁殖を守る活動をしてくれているようです。そのおかげでホタル鑑賞ができています。その時に聞いた話では、ここはホタルのエサとなるカワニナや草木、砂もあり生息するのに最適な場所であること。また、滋賀県に生息するゲンジボタルは卵から成虫になるまでに約一年かかり、成虫の間は水しか飲まず、メスは産卵した後は二、三日で一生を終えることでした。幼虫の約十ヶ月間、水の中でカワニナやタニシなどを食べながら成長していきます。一生の大部分を水の中で生きているので、きれいな水とエサが豊富であることが大切だとわかりました。たくさんの小さな光が飛び交いながらゆらゆらと幻想的な風景を見て、僕は自然の大切さと、このきれいな水を守りたいと思いました。ただ、僕が小学一年生の時に見たときから比べるとホタルの数が年々減っているような気がしました。

小学三年生の時、河辺いきものの森で里山保全に参加しました。夏の活動では水質保全や自然観察の目的で、川に入りました。その時に水の生き物を知り、水はどこからどうやって来ているのかを、勉強をしました。その時の僕は、難しい話よりも目の前にある川でサワガニを発見したり、水生昆虫をつかまえることに夢中でした。今となっては、生き物がたくさん生息している環境がとても大事であることに気がつき、その経験がきれいな水とは何なのかを考え始めるきっかけとなりました。

「本当にきれいな水とは何なのか。」人間にとって、飲める水こそが、きれいな水かもしれませんが、生き物にとってはきれいな水とは言えないのではないか。水道水は殺菌作用がある塩素が使われています。さらに、この森の川のことを調べました。もちろん水道水は使われていません。愛知川（えちがわ）の川底の砂利層により自然に浄化されたものを伏流水と言い、それがわき水となって、森のあちこちに小さな流れが川になっているそうです。その仕組みをやっと理解できました。生き物たちにとってきれいな水とは、有害物質の含まれていないことはもちろん、エサとなるプランクトンが豊富にあることもきれいな水の条件です。植物、海や川底で生きる魚たち、昆虫、動物たちにとってそれぞれが、安全に暮らせる水、きれいな水はひとつではないと僕は思います。

そのためにできることもひとつではないのです。そこで、家族できれいな水にするためにできることを考えました。僕ができることは、外出先や川などにゴミを捨てない。ゴミがあったら拾う。食べ残しをしない。食器の汚れはふき取ってから、歯をみがく時も水を止めてむだにしない。洗剤を使いすぎない、お風呂やシャワーの時もむだにしない。今日からできることを始めることです。日ごろから、水に困っていないと、つい水の大切さを忘れてしまいます。

きれいな水を守りたい。みんなできれいにしようとする「想い」を忘れないようにしたいです。ひとりひとりが水を大切にすることができれば、その水を取りまく環境を守ることができます。この先、自然や生き物、人間たちがうまく共生し続けることで、十年後二十年後にホタルがたくさんいる風景を見ることができるはずです。僕はこれからも自分から水の大切さを発信し続けたいです。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

生かし生かされる

長崎県　長崎大学教育学部附属中学校　一年　小嶺　彩

顔を洗うこと。ほかほかのご飯を食べること。歯を磨くこと。温かいお風呂に入ること。そして、水を飲むこと。これらは私たちにとって当たり前で、なくてはならないものであり、これらには全て「水」が関わっている。

「蛇口をひねれば水が出る」

私は今まで、ごく普通の当たり前のことだと思っていた。でも、社会の現状はどうだろう。私たちがきれいでおいしい水を飲んでいる瞬間、どんなに汚くてもその水を飲むしかない人がいる。私たちが自動販売機で水を買っている瞬間、世界には安全な水を手に入れられない人がいる。そう考えると、「水」とは、決して当たり前ではないことを痛感する。

水がどれほど大切なものか。私はふと曾祖母の話を思い出した。私の住む場所から、ある世界遺産が見える。それは、「端島」通称「軍艦島」だ。明治から日本の近代化を支えたその島は、もともと岩礁だったため、水の確保は非常に難しいことだった。長崎市から船で運ばれる配水が、飲み水や洗濯用水などに制限されることもあった。水が貴重な資源だったからこそ、島民全員が節水に取り組んでいた。最終的には、日本初の海底水道が設置され、水の確保ができるようになった。曾祖母はその島に住んでいた友人がとても感激していたのを覚えている、と言っていた。

長崎の歴史から探っても、水は、昔から貴重なもので、私たちの生活に欠かせないものだったことが分かる。だが、「欠かせないもの」というだけではない。

「長崎大水害」。これは、今から約四〇年ほど前の、二九九人が犠牲になった災害だ。土石流、がけ崩れ、河川の氾濫などにより、倒壊・浸水など多くの家にも被害が生じた。私は、学校でも学習し、担任の先生や両親、祖父母から実体験をきいて恐怖を感じた。「水」とは、私たちの生活に「欠かせないもの」で、私たちの生活を「脅かすもの」でもある。

もう一つ私が伝えたい水の表情、それは癒しでもあることだ。長崎県の島原市を訪れた時、私はそれを実感した。島原市は、水がきれいな町として有名だ。現在島原市には五〇か所を超える湧水地がある。そんな島原市で私は、信じられない光景を目にしたことがある。それは、車道の脇の水路を鯉が泳いでいたことだ。私が先に感じたのは、癒されるというよりも、驚きだった。今までそんな光景を一度も見たことがなかったからだ。調べてみると、島原市では、定期的な清掃が行われているそうだ。水路を鯉が泳ぐ、という美しい光景を目にすることができるのは、地元の方々の努力があってこそなのだなと思う。

私たちの生活に欠かせないもの。私たちの生活を脅かすもの。私たちを癒してくれるもの。そんな「水」に、私たちはどう関わっていくべきなのだろうか。私は、「水との共栄」が大切だと考える。互いに助け合い、栄えていく。私たちは水を使って生活する。でも、無駄にせず大切に使うことで、水と共栄することができ水に寄り添うことができると思う。

水を改めて考えていくと、当たり前だけど、ありがたいことに気付く。私の何気ない日常にも数多くある。私は習い事のダンスで、一時間以上練習すると喉が渇く。水を飲むと自然に「おいしい！」と言葉が出るくらい生き返る。このような何気ないことでも、水と生命が直結していることを感じる瞬間だ。

世界には、水を簡単に手に入れられない人がたくさんいる。私たちにできる最大限のことは、長崎大水害に関わらず津波など、災害の教訓を伝えることで、水がどれだけ大切なのかを知ること。水を決して無駄にせず、傷つけないこと。そして、多くの人に水が届くように支援すること。この三つだと思う。私たちの豊かな生活ひとつひとつに感謝し、これを今、多くの人へ、そして次の世代へとつなげていきたい。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

メダカが活き活き泳ぐ川

京都府　京都先端科学大学附属中学校　二年　楠本　健琉

僕は生き物が好きだ。春にはメダカ、夏にはカブトムシやクワガタを捕まえて飼育している。ふと考えた。カブトムシやクワガタは京都市内でも見つかるのに、メダカがいない。なぜだろう？

僕がメダカを採るのは、京都府北部にある祖父の田んぼの用水路だ。京都市内との違いは何だろう。祖父に尋ねると、「メダカはきれいな水でしか生きられへん。ここには、皆が食べるお米を育てるための澄んだ水と豊かな自然があるからメダカもたくさん育つんやで。」と教えてくれた。僕はハッとした。メダカが暮らせるかどうかは、水の清らかさにかかっているんだ。「じゃあ、鴨川の水がもっときれいになればメダカも住めるん。」と尋ねると、祖父は「そやで。」と力強く答えた。

ネットで調べると、メダカは京都府のレッドリストに載り、絶滅危惧種に指定されているという衝撃的な事実を知った。本来、どこにでもいる普通の魚だったが、今では府内の生息地も限られ、京都市内ではほぼ絶滅状態にあると書かれていた。ショックだった。さらに調べると、かつて絶滅したと考えられていた深泥池で、奇跡的に発見され、今は保護活動が進められていることが分かった。一年前学校の探究活動で深泥池に行った時には見つけられなかったが、確かにいるんだ。

なぜメダカはこんなに減ってしまったのか。理由は三つ。一つ目は、生息地の消失。都市開発で田んぼや小川が減り、住める場所が失われた。二つ目は、水質汚染。農薬や生活排水で水が汚れ、メダカが生きるのに適さない環境になった。そして三つ目は、外来種の侵入。ブラックバスやブルーギルがメダカを捕食し、生息を脅かしていた。このままでは、メダカは本当にいなくなってしまう。

何かできることはないか。僕は祖父の庭にある大きな水鉢でメダカを育てることにした。用水路でメダカを捕り、水鉢に入れた。けれど、しばらくすると水が濁り、メダカの動きが鈍くなった。このままではダメだ。まず、水草で酸素を増やし、ろ過砂利を敷いて水の汚れを減らした。また、別の水鉢にためた雨水を利用してカルキを抜いた自然な水を入れるようにした。メダカは元気に泳ぎ回るようになり、卵を産んだ。共食いしないよう、卵を別の容器に移し、更に幼魚用の環境も整えた。それぞれに雨水が流れ込むような装置も作った。手間はかかったが、百匹を超えるメダカが育った。この経験から、僕は「水を美しく保ち、環境を整えることでメダカの命をつなぐことができる」と実感した。

その後、さらに身近な水環境にも目を向けた。夏休みの自由研究で近所の公園のビオトープを調べてみた。アメンボウやタガメ、水カマキリが生息する場所で二週間。数か所で水を採取し、顕微鏡で観察したところ、流れのある場所にはミジンコやアオミドロなどの微生物が豊富にいたが、流れのない淀んだ場所ではヘドロがたまり、生き物がほとんどいなかった。この違いから、水の循環が生態系にとって重要であることを学んだ。

僕はこの体験を通して、日常生活でも水を守るためにできることがあると気づいた。例えば、家や学校で水を無駄にしないこと、雨水を水やりに活用することなど、小さな工夫の積み重ねが水環境の改善につながる。京都でも水環境を整え、メダカや蛍、アユ、オオサンショウウオなどを守る活動が行われている。僕もその活動に参加したい。一人一人ができることは、小さな取り組みでも、人間の体の六十％、魚は七十五％が水でできている。すべての生き物の命を支える水を大切にする人が増えれば、メダカが住める場所も、僕たちが快適に暮らせる環境も広がっていくはずだ。僕の夢は、いつか京都市内の川で再びメダカが元気に泳ぐこと。そのために、水を守る活動を広げたい。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

水道への感謝と僕の決意

石川県　学校法人稲置学園星稜中学校　一年　吉田　喜一

僕は今まで、水道についてあまり考えたことがありませんでした。「蛇口をひねる」という言葉がありますが、僕が思いうかべる水道、特に手洗い場のイメージは、センサーに手をかざすと自動で水が出てくるタイプです。場所によっては、お湯が出てくる場所もあります。便利だなぁとは思っていたけど、それが特別なものだとは思っていませんでした。

今回この作文を書くにあたり、日本の水道の仕組みを考えると、非常に優れた技術だと改めて思いました。

僕は昔のことを考えてみました。人々の暮らしを考えた時に、最初に思い出したのは桃太郎のお話です。おばあさんは川で洗たくをしていました。つまり、水道はまだ無かった事が分かります。次に思い出したのは、トトロです。作中では、井戸水を使って炊事をしています。その次に思い出したのは、ドラえもんです。のび太のママは、水道のある台所で料理をし、洗たく機で洗たくしています。

桃太郎の時代背景は、室町時代末期から江戸時代初期頃とされています。トトロの時代背景を調べてみると、昭和三十年代初頭とのことです。約七十年前ということになります。ドラえもんのアニメがスタートしたのは、一九七九年です。今から四十六年前です。

つまり、トトロの時代からドラえもんの時代までの三十年弱の間に、水道をはじめ、人々の暮らしが激変していったことが分かります。この三十年間は、高度経済成長と呼ばれる時期と、日本の公害病の問題が深刻化した時期と重なることも分かります。日本の水の安全がおびやかされた時代です。

この時期を乗り越えてくれたおかげで、僕達の世代は、水が安全ではないものかもしれない、とは考えたこともなかったのだ、と思いしらされました。

「安全」とは色々な意味で捉えることができます。公害にさらされているものではない、という意味と、地震などの災害時にでも「出なくなる」という心配がない、という意味、それから、「無くなる心配がない」という意味の安全だと僕は考えました。

能登半島地震発生時には、大規模な断水が長く続いたことは記憶に新しいところだけど、それでも、様々な公的支援や、水道に関わる施設の人々、暮らしていた人々の工夫や苦労のおかげで、少しずつ前に進んでいると思います。僕にはまだ感謝することしかできないけれど、水道が出なくなるなんて考えもしない、危険だから直接飲めない、なんて考えもしないで生活してこられたことに、改めて感謝しなければならない、と思いました。

僕達の世代は、「どんどん作れ！どんどん増やせ！」という時代ではありません。保育園の頃にはすでに「エコ」という言葉は知っていたし、ＳＤＧｓ、サステナブルという言葉も小学校で習いました。「限りある資源をどう守るか？」という時代です。

僕が小一になった時、過去最少人数の新一年生、とニュースになったそうです。年々人口が減少していることが分かります。人口が減少している中で、水道に関わる職業を選ぶ人、となると、更に割合は減ることも想像できます。そうなると、水道の安全を維持するのが難しくなる日がくるかもしれません。そう考えると、人も資源といえます。

水の未来は、僕達一人ひとりが担うのだ、守られるだけでなく、守るにはどうしていくべきか、考えていきたいと思いました。今すでに、待ったなしの環境問題や人手不足の問題にさらされています。僕が社会に出るにはまだ時間があるけれど、水道に関わる仕事の皆さんへの感謝の気持ちを勉強に注ぎ、しっかりと納税できる人になっていきたいです。

シャワーズ賞（優秀賞）

生き物との共生のために

福井県　福井市大東中学校　三年　三木家　杏珠

私は「水」という言葉を聞くと必ずと言っていいほどに田んぼが思い浮かぶ。私の家は福井市の市街地から約四十分車を走らせたところに位置する上味見という場所で、無農薬栽培米を育てる活動に参加している。そこは私の住んでいる場所とは正反対と言ってもいいような自然豊かな地域だ。私は毎年、稲作の時期になると、家族とともにその活動の一環である草取りに参加している。今だからこそ、農作業の戦力として参加しているが、小さな頃は、ひたすら生き物採集をしていた。父といっしょにヘビをつかまえたり、サワガニやオタマジャクシ、カエルを探していたのも楽しい思い出だ。

稲作は、田植えが始まる春から、稲かりをする秋にかけて行われる。この中で一番大変なのが「夏」の農作業だ。その活動では、米を無農薬で育てているため、手作業で草むしりをしなければならない。真夏の日差しに背中をジリジリと焼かれながら、腰をかがめた体勢で作業し続けるため、想像以上に重労働だ。おまけに次の日には、全身が動かなくなるほどの筋肉痛におそわれる。しかし、私はこれほどの悪条件でも、田んぼに足を踏み入れるのを嫌がったことは一度たりともなかった。私には農作業の後に一番楽しみにしていたものがあったのだ。それは「こしょうずの滝」での水浴び。同じ田んぼ仲間に教えてもらったのがきっかけだ。初めてこしょうずの滝を目にした時の感動は今でもよく覚えている。見たことがない程に澄んだ冷たい水。そしてサンショウウオと初めて出会ったのもその時だ。サンショウウオという存在を知らなかった私は、母の呼び声でそのことを忘れ、車に戻った。

再びそのことを思い出したのは、近くの温泉で疲れをいやしていた時だった。ふと目に入った掲示物。そこにはついさっき目にした小さな生き物が写っていた。絶滅とサンショウウオの二つのキーワードが目に飛び込んできた。そう、先程見た生き物は絶滅の危機にさらされているサンショウウオだったのだ。

私は家に帰ってすぐさまパソコンに向かい、その二つのキーワードを打ち込んだ。すると、その要因の一つとして、「農耕地の放棄に伴って起こる産卵場所の消失・悪化」が最も多いことが分かった。里山の稲作では、ため池が作られ、水田の周囲には水路がめぐらされる。このような場所にサンショウウオは産卵するため、水田が一つ減るごとに、サンショウウオの絶滅に一歩近づいてしまうのだ。

それは私の住む地域でも着々と進んでいる。元々水田だった土地がうめ立てられ、一つまた一つと家が建っていく。人間にとって住みよい街になる一方で、サンショウウオ達生き物にとっては生きられない街と化す。

そんな私達に今求められているもの。それは「共生」だ。私達が今住んでいる場所を水田に戻すことは難しい。しかし、今ある水田を守り、今サンショウウオの生息が確認されている場所を保護することならば可能なのではないだろうか。

水田を守るために私にもできることを考えてみる。それは、「無農薬栽培の田んぼの保存活動に参加し続ける」ことだ。水田を守り続けることは、サンショウウオだけでなく、お米を主食とする私達日本人の生活を守ることにもつながる。また、水田が減り続けている要因には、便利さを求める心だけでなく、担い手不足も挙げられる。農業を始めるには高額な初期費用がかかり、また天候に左右されやすく、収入も安定しづらい。そんな中でも農家さんは水田を守り続けてくれている。私はこれからも水田を守り続けている人々への感謝の気持ちを忘れず生きていくことを心に誓った。

中央審査会特別賞（優秀賞）

川の始まりと水の未来

滋賀県　東近江市立能登川中学校　三年　谷澤　あかり

みなさんは「川の始まり」を見たことがありますか？

私が住んでいる滋賀県では小学四年生になると「やまのこ」と呼ばれる森林体験学習があります。やまのこでは、近くの山や森に行き、間伐体験や森林散策を通して自然の大切さや保全活動の意味などを学びます。

私も四年生の時に市外の山でやまのこ学習を受けました。森林散策で遊歩道を歩くとやがて岩肌から水滴が滴る場所に着きました。

案内人のおじさんが私たちの方を振り向いて説明を始めました。

「皆さん、この岩から滴っている水滴が見えますか？これは、川の始まりです。山に雨が降ると雨水が土の中に染み込みます。雨水は何十年もかけて土の中を通り、こうして地表に出てきて、川になるんですよ。山は沢山の雨水をためるので「緑のダム」とも言われています。緑のダムによって雨水は濾過されてきれいになるんですよ。山と水は深くかかわっていて、きれいな水を守るには、健やかな山を守ることも大切なのですよ。」

私は目の前で滴る水滴がやがて川になり、湖に流れ、海の一つとなり、また雨として降る長い過程を想像して、水の雄大な旅に感動しました。

やまのこで川の始まりに会ってから、私は環境保全活動に興味を持つようになりました。

一昨年の春から、年に一回行われる近所の川の清掃活動に参加しています。活動では主に外来種の水草抜きや川底に溜まったヘドロの掻き出しなどを行っています。

清掃活動が始まり、早速スコップで泥を掻き出そうとすると泥の中からカツンと硬い手ごたえがしました。何だろうと思って水中からそれを引き上げてみると、なんとジュースの空き缶でした。驚いて周りを見ると、私の他にもゴミを持っている人は何人かいました。その後も所々でゴミを見つけ、いつのまにか活動内容の中心はゴミ拾いへと変わっていきました。活動が終わる頃にはなんとゴミ袋四袋分のゴミが集まりました。

私は身近な環境が人によって汚されていたことを知り、心が痛くなりました。今日拾ったゴミやこれまで川を流れていったゴミが環境に大きな悪影響を与えたことを考えると恐ろしくて鳥肌が立ちました。

清掃活動を行った翌日、川を見に行くとマガモの親子、シラサギ、ホンモロコの群れなどが見られました。心なしか、川の生き物たちもきれいな川に喜んでいるように見えました。私はその瞬間昔見た「川の始まり」を思い出し、川だけでなく水の旅路全てをきれいにしたい、人間を含む、水と共に生きている生き物を幸せにしたいと思いました。

私は水を守るためにわたしにもできることを二つ考えてみました。

一つ目は森林を育て、「緑のダム」を豊かにすることです。植樹体験や間伐体験に積極的に参加し，きれいな水源の源となる健やかな森林を育てていきたいです。家族や友達、地域の方にも呼びかけ近くの山から健やかに活性化させたいです。

二つ目は水の大切さを様々な人に教えることです。水に関するポスターを作って公民館や市役所など公共の場所に掲示したり、水についてのクイズなどをＳＮＳに投稿したりすることで多くの人に水に関心を持ってもらいたいです。

私は四年生の頃に見たあの小さな雫を今でも覚えています。いったん「緑のダム」に染み込んだ水が濾過されて再び地表に流れるには四十年ほどの月日がかかるそうです。今私たちが汚した水も、大切に使った水も、長い月日を経て未来の私たちに戻ってきます。私は水を守りたい。私が大人になっても、川の始まりの雫が美しく輝くように。